

今、日本から始まるがん撲滅への挑戦！

—「第一回がん撲滅サミット」へのご参加・ご支援のお願い

東京女子医科大学脳神経外科講師・ガンマナイフ治療室長
第二回国際定位放射線治療学会学術大会長

林 基弘
はやし もとひろ



がん脳転移…医師から突然こう宣告を受けたら、いったいどのように感じられるだろうか。外来初診の患者家族から何う印象は、まさに「絶望」と「絶命」の二言しかない。「がん脳転移Ⅱ死」というイメージしか持たれないのではないか。しかし、治療適応さえ満たされていれば、今や日帰り治療で、実に九〇%以上の患者が救われる治療法がある。

これこそ、私が専門としているガンマナイフ治療（脳定位放射線治療）である。一九九〇年に国内に導入され、実に二五年が経過している。〇・一mmの精度で腫瘍と正常脳組織をしっかりと分けて、まるでメスで切り取るかのごとく腫瘍のみを治癒する高精度放射線によるピンポイント治療である。しかも、患者の体への負担は、頭に枠を装着し寝ているだけな

ので、極めて軽い。翌日から仕事をしたければ普通にできる。全世界ですでに五〇万人以上がこの治療を受けており、わが国では保険収載もされているが、残念ながら認知度はまだ決して高いとはいえないのが現状である。

患者の情報収集能力で 人生や余命が変わる

現代のがん治療の指南書とも言うべき「標準治療」で定められているがん多発脳転移（特に四個以上）の標準治療は、全脳照射（腫瘍を含め正常脳全体に放射線を当てる）となっている。つまりガンマナイフは、一つ一つの腫瘍へは効果はあっても、多発脳転移症例に関して現状では標準治療の扱いとなっていない。治療医の指示どおり「標準治療Ⅱ全脳照射」

を選択し、たとえ急場が凌げたとしても、二年後には約半数の患者が認知機能障害を負ってしまう。患者の意思で、ガンマナイフを選択しない限り、残された時間のQOLは確約できないのが現状だ。特に、社会的重責を担う方々にはこの事態は簡単に容認できないのではないだろうか。まさに、患者の情報収集能力で人生や余命が変わってしまう時代となった。

さらに、「標準治療」に沿った治療が効かなくなれば、自動的に「がん難民」へと移行させられてしまう患者は約半数に及ぶ。この状況にまず歯止めをかけていかねばならない。どんな状況でも、がん患者は決して「難民」ではなく、立派な「国民」である。個々の「したい」「生きたい」をもっと尊重できる医療

社会こそ望まれるのではないだろうか。

患者は何をしたいのか

私は治療の前に必ず患者に確認していることがある。それは、「病気を克服した後は何をしたいのか、せねばならないのか」である。がん宣告、しかも脳転移の発覚は患者すべてから生きる希望を奪い取る。しかし、私は、生きるための理由や希望がなければ、治療する意味すらないと考え、明確な目的を皆に持たせてから治療プランを提案するように心がけている。

『Life is Line』つまり人生は線であり、医

師が提示する治療は人生という線から見れば単に「点」にすぎない。医師がその人の生き方を傾聴し、そこに「点」としての治療を打ち、最終的に患者の「したい」を叶えられるよう最大限の手助けをすることこそが目指すべき真の医療ではないか。多発脳転移に対する「ガンマナイフ+分子標的薬剤」の治療ベストミックスは、まさに「生きたい」を叶えるための治療オプションとして私は率先して行っている。

第一回がん撲滅サミットを開催

来る六月九日、われわれはパシフィコ横浜

にて「第一回がん撲滅サミット」を主催する。現場医師が日々の臨床にて強く感じることを、われわれ自身が旗揚げし、がん撲滅への挑戦をまさに今日本から世界に発信する。大会長による開会宣言を皮切りに、「がんそのものへの撲滅」に向け、がん医療において世界で活躍する医師・研究者による講演、和泉洋人

内閣総理大臣補佐官(健康医療戦略室室長)による特別講演、および中見利男氏(作家・ジャーナリスト)による文化講演を賜る。その後、メイン企画「ザ・サミット」『今、日本から始まるがん撲滅への挑戦!』と題し、ゲストにダンカン氏(タレント・俳優)を迎えて講演をいただき、その後、本邦初となる「公開セカンドオピニオン」を企画する。がん治療の最先端エキスパート六名が登場し、会場参加者よりリアルタイムにがんに関する相談を受け具体的に解決していく。最後に、「横浜宣言」を誓い閉会となる。

われわれの覚悟と決意は、がん撲滅の日まで続く。特に日本経済団体連合会の会員企業においては、がんを負ってしまった職員たちに対し生きる希望を与え、「ノーリストラ宣言」をお願いしたい。われわれも、さらに具休性と継続性を持たせ突き進むためにもNPO法人「がん撲滅サミット事務局」を開催日までに設立する。皆様のご参加、ご理解、そして直接的かつ継続的の支援を得られれば大変にありがたい。

日本国民を救うのは、やはり大和魂を持つ日本人しかないと信じている。私も医師としてだけでなく、「国師」としての職責を果たす覚悟で臨む所存だ。